

---

# お嬢様のフーガ～金色のアサシン～

しゃーむ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

お嬢様のフーガ〜金色のアサシン〜

### 【Nコード】

N9078U

### 【作者名】

しゃーむ

### 【あらすじ】

梓の引きこもり事件から数日が立ち、真と梓、それを囲む同級生らは相変わらずの日常を過ごしていた。

季節は夏に移り変わり、県立西高校の生徒たちの間にはどこかだらだらとした空気が流れていた。

そこに突然の転校生が現れる。

アメリカからの留学生、シンシアと名乗るブロンドの髪をなびかせる美少女だった。

その金髪の美少女は、かつて梓が話していたアメリカの友人。

ただならぬ胸騒ぎを感じる真だが、まさに予感的中し、また騒動に巻き込まれることになる。  
手始めとして、ファーストキス（真の中では）を奪われた。

## 女神降臨（前書き）

こちらは『お嬢様のフーガ』後輩で、同級生で、ストーカーで、の続編になりますのでそちらからお読み下さい。

## 女神降臨

「……………あつ……………はんつ……………先輩……………」

白くて柔らかな胸に指を這わせると、彼女は艶めかしい吐息を漏らした。小さく横たわる裸体に息を飲み、そのまま首筋に優しく唇をなぞらせる。彼女は小さく震え、身を擦らせた。

彼女の秘部へ顔を近づけると、女の匂いが鼻腔の奥へ突き刺さる。誘うように濡れるソコへ指を忍び込ませると、彼女の体が大きく跳ねた。

「んっ……………先輩っ……………あつ、あつ……………んんっ……………！」

興奮を抑えきれず、俺はついにその肢体を乱暴に……………って、

「やっぱこんなん読んでられっかぁーっ！」

そこで俺は手に持っていた一冊の文庫本を投げ捨てた。

「あー、いーけなーいんだー！先輩がどうしても梓とするのが無理だつて言うから官能小説の朗読で勘弁してあげたのにー」

「お、おお前が変な声出すからだろ！俺ひとりで読むだけならまだしも妙に感情込めて相槌入れんじゃねえ！」

「うひひっ。もしかして先輩、梓の声に興奮しちゃったんですかぁ？」

「するか馬鹿！」

どうも、来栖真です。

今、俺の部屋で、俺の罰ゲーム中だった。その内容は、俺が官能小説を朗読すること。初めは「梓を抱いて下さい」なんて言われてたからこれでも頑張つて諦めさせた方なんだ。

放課後、珍しく梓の方からゲーセンに行こうと誘いがあったので二人で遊びに行った。前々から思っていたことなのだが、梓の奴はどうやら勝負事が好きらしい。ゲーセンに入つてまず目に止まったのがリズムゲームのバージョンアップ版だった。運良くそれが空いていたためにさっそくやってみただけ、梓の奴がほんと下手で

下手で。悔しかったからなのか半べそかきながら「しょ、勝負です」と言ってきた。「やる気が出るから梓が勝つたらご褒美を下さい」なんて、さらさら負ける気なんてなかった俺は承諾し、見事、負けた。俺は、騙されていた。

ほぼパーフェクトでゲームを終えた梓を呆然と見ていると、してやったりの顔で「この筐体、家にありますから」などとぬかしやがる。最初にボロボロだったのは俺を勝負に乗せる巧妙な罠だったのだ。俺はまんまと罠にはまったのだ。学習能力がなかったのだ。

それから家に帰って来て、いきなり服を脱ぎ出した梓を必死で止め、今に至っている。

神宮寺梓。国内では有数の金持ちで、美少女で、頭も良い、俺のストーカー。俺より一つ年下で、俺が通う県立西高校の後輩、なんだけどどういうわけか同じクラスの同級生。神宮寺財閥の権力を駆使して、無理矢理俺と同じクラスにやってきたのだ。

校内唯一の茶髪で、ツインテール。背丈は小柄で、表情筋を豊かに使う怪面百面相。超ポジティブ。あと変態。

俺の悩みは、常にこいつが付きまとうこと。俺と梓は恋人じゃない。今だってこんなことしてるのは、俺が梓の我が儘に付き合っているだけなのだ。金持ちで、可愛くて、俺のことが大好きな梓には、俺のことが大嫌いな怖い父親がいる。梓に手を出すと、俺は神宮寺の力を持ってしてこの世から抹消される。逆にこいつを振って泣かせても、この世から抹消される。

そんなわけで、梓に手を出さないように、泣かさないように、中途半端な関係を続けているのだ。

「でもでもお、先輩顔真つ赤ですよ。あんっ……はあ……あっあつあっあつ……どうです先輩。興奮してくるでしょう？ ハアハア……」

「お前が興奮してんじゃねえか。近付くな変態」  
「きゃいーん」

ツインテールをパタパタ振って俺の腕にしがみつく。梓いわく、

俺の左腕が定位置なんだそうだ。  
甘える顔は、可愛いんだよな。

制服の衣替えも済み、本格的な夏の到来を目でも感じさせていた。夏は暑い。左腕に人間がひとりくつついてるもんだからなおさら暑い。登校中は、梓は決して俺の腕を離さない。どれだけ暑くとも汗をかこうとも。下手をすれば汗を舐めようとまでしてくるのでその度にデコピンをお見舞いする。

学校へ着いても梓は離れない。だけどそれを見て変に思う生徒も学校にはいない。梓は金持ちゆえの一般常識というものが少し足りておらず、多少奇抜な行動をしたりする。平気で早退したり教室の中にスタンドミラーを置いたり。そんな梓といつも一緒にいる俺は、梓と共に一種の学校名物になってしまっているのだ。

それは教室の中でも同じ。俺なら腕を組んで教室に入ってくるバカップルなんて見たらイライラして蹴り飛ばしてやりたくなるもんだけどな、今じゃ微笑ましい眼差しをクラス中から送られていたりする。最初は距離を置かれていた突拍子もないお嬢様も、いつの間にか微妙だけどクラスに受け入れられているのだ。

梓の席は窓際最後尾の特等席、俺はその前。席替えがあつたんだけど、何故か俺と梓には席替えのくじが回ってこなかった。これもいつの間にかこの位置が俺と梓の定位置になっていた。

朝のHR前の時間はクラスメイトたちが雑談に興じ、やり忘れた宿題を必死にやったり、それなりに騒がしい時間だった。

でもその日は、いつにも増してざわついていた。いくら俺と梓が毎度のこととはいえ、教室の中に入れば何かしらの反応があるのだが、クラスメイトたちは俺と梓には見向きもせず雑談に夢中だった。

俺は自分の席に着き、同じく自分の席に着いた梓に尋ねる。

「なあ。今日ってなんか行事あつたっけ？」

「いえ。今日は平常授業だけのはずですけど」と首を傾げながら答

える。

「だよな」

気にすることもないんだろうけど、クラスメイトたちがほぼ全員うきうきわくわくみたいな顔で話しているのでどうしても気になってしまう。もしかして俺と梓だけ八ブられたりしてないだろうかなんて心配もした。

梓もみんなの様子が気になったのか訝しげに眉を寄せる。

「みなさん、何か落ち着きがないですね。そんなに梓と先輩の結婚式が楽しみなんでしょうか？」

「そんな誰も気にしねえよ。ありえないし」

「え？ もう籍は入れてますよ？」

「はあっ!？」

「冗談ですよ。まだ十八歳じゃないでしょう？」

おう、そんな基本的なことを忘れるとは。でもさすがに神宮寺とはいえ法律には従うようだ。

「まあ、その気になればいくらでも誤魔化せますけど」

「お願いだから、同意のもとでな？」

やっぱり常識なんて通用しないんだね。

そんなどうでもいいことよりも、俺は近くで話すクラスメイトの話しに耳を傾けてみた。

「……………そう……………外国人だって……………」  
「……………どうして……………」  
「……………クラス……………」

「……………」  
「……………美人……………」  
「……………編入生……………」  
「……………金髪だった……………」

……………すごくきれい……………」

喧噪の中で聞き取れたのはそんな言葉だった。要訳してみると、外国人の編入生がいるらしい。それもおそらく女子。金髪の美女らしい。響きはいいよな。クラスの男子はもちろんのこと、女子まで何やら羨望の眼差しを輝かせていた。

「梓、編入生らしい」

「そうですね」

梓は全く興味がないようにそっけなく答える。まあ普段から外国

に行ってる梓だしな、外人なんて珍しくもないか。

俺もそこまで興味を惹かれるようなことでもなかった。どれだけ物珍しかろうと、俺は梓の相手をするので精一杯だからな。ましてや金髪美女に興味なんて示していたら梓の奴がどれだけうるさいかわかったもんじゃやない。編入生とやらが二年に入って来なかったら拜む機会もそうないだろうしな。

さして梓との話題にもならないと思った俺は、梓と放課後の予定なんかを話していた。

そして朝のHR。

「えー、今日はみんなに編入生を紹介する」

噂の彼女はうちのクラスだった。

その時からだった。すでに俺は違和感を感じていた。既知感を感じたのだ。梓がこのクラスに昇級してきた時のことを思い出した。

梓は神宮寺の権力を使い、一年から二年へ昇級、そして都合良く俺がいるクラスに来た。言わば梓はこのクラスには余分な一名なのだ。そんなクラスにまた編入生。他のクラスだってあるのに、どうしてこのクラスなんだ。時期だっておかしい。もう夏休みまで一カ月を切っているこの時期にわざわざ編入なんてしてくるのだろうか。

「なんと驚けー。金髪の外人さんだー。アメリカからだぞー。びっくりだなー」

担任の今泉先生もどこか投げやりだった。ふつふつと感じる。嫌な予感しかしなかった。俺に金髪の知り合いなんていない。その編入生とやらがこのクラスに来る原因として考えられるのは、梓だ。もし俺が睨んでいる通り梓が絡んでいるとすれば、ろくなことにならない、はずだ。

そして俺は机の前に置かれているスタンドミラーを覗く。俺の顔が見えるようにと梓が置いたものだ。それで当の梓は、先程の同じように興味なさそうに今泉先生の話しを聞いていた。ふーん、みたいな、本当にどうでもよさげな感じだった。その様子だと編入生のことは何も知らないようだった。梓の知り合いじゃないのだろうか。

ならば俺の懸念も取り越し苦労で済みそうだ。

そんな考えが甘かった。

「では紹介する。入ってきたまえ」

一斉にクラスメイトがざわつく。みんながみんな期待に満ちた目で教室の入り口を凝視する。

教室のドアがゆっくりと開かれる。

そしてクラスメイトたちが、一気に静まりかえった。

そして俺は、思わず目を奪われてしまった。

一言で言うなら、美しい。美人とかそういうんじゃない、美しいだ。まるで人類が作り出した最高の芸術品が歩いているようにも見えた。歩く度に揺れるブロンドのストレートヘア。生まれつきでないと決して手にすることできない輝くブロンド。それは光を撒き散らしているようにも見えた。モデルでも羨んでしまいそうな完璧なプロポーション。学校指定の制服を着ているが、彼女が身につけていればそれはどこぞのデザイナーが手掛けたドレスにも見える。そして長いまつげ、透き通るようなサファイアブルーの瞳。真っ白い肌で、小さい顔の中に計算され尽くして配置されたような顔のパーツ。ここで初めて、人間は平等でないことを実感した。もはやこれはどれだけ金があんぬんの問題じゃない、彼女は人類最後の至宝だった。

長々しくこんなことを思ってしまうほど、思わされてしまうほど、完璧な人間がそこにはいた。

啞然、呆然、愕然、クラスの何人かの女子は泣いていた。「うとう、神様、生きててごめんなさい」「あれが、女神なんだわ」「自分が恥ずかしい」「見ないで、みんな私を見ないで」自分の存在が愚かしく思えるほどの美女を目の前にして、女子はそう呟くしかなかったのだ。

金髪の彼女は教壇の前に立ち、天使の笑顔を見せた。

「こんにちは。日本のみなさん」

一言目は、流暢な日本語だった。ずっと日本で暮らしていたので

はないかと思うほど、はつきりとした日本語だった。そしてその声は、聞くだけで救われるような、透き通った優しい声だった。携帯片手に録音に走る奴もいる。

教壇の方を見た事で、スタンドミラーに映る梓の姿が自然と視界に入った。その梓も、啞然として目の前の女神に見入っていた。

気持ちはわかるぞ梓。お前がどう足掻こうが越えられないものだからであるんだよな。だけどお前は悪くない。悪いのは不公平な神様なんだよ。

そして女神は、自らの御名を口にしようと、

「はじめまして。わたくしの名は」

「シンシアちゃんっ！」

したら梓が突然立ち上がり叫んだ。

クラスメイトもハツと我に返り、梓に注目する。

「ハロー、アズサ。ご機嫌いかがかしら？」

「どっ、どっ、どどどどうして!？」

梓は口をパクパクさせながらシンシアと呼んだ女神を指差していた。

シンシア……シンシア……どこかで聞いた名前だった。

そうだ、たしか、アメリカの……梓の、友達!

「アズサがここにいと聞いて、やってきましたの」

にこーっと、満面の天使スマイルを披露する。クラスメイトからは感嘆の吐息が漏れた。

「えっ、えっ、えつと、あの……」

梓は激しく動揺していた。友達が来たんだろ、よかったじゃないか。なんて、そういうことを言っただけで笑顔が返ってくる雰囲気じゃなかった。梓の口元はひくついて、脂汗をかいているように見える。蛇に睨まれた蛙、そんな感じだ。

「はじめまして。シンシアですわ」

シンシアさんは今一度自己紹介して、優雅にお辞儀をして、カツカツと、こちらに向かって歩いてきた。笑顔を崩さず、余裕に満ち

た表情だ。

そして、これも既知感がある光景だった。梓がこのクラスに来たときと同じ。梓はあの時、俺に一瞥もくれずに後ろにいた山下くんの席を買い取った。シンシアさんも俺に一瞥もくれずに後ろの梓に

「あなたがマコト、ですわね？」

「ふえ？」

シンシアさんは俺の横で立ち止まり、俺を見て、俺の名前を呼んだ。ドキリ、と心臓が跳ねる。見つめられて、何故か俺も青い瞳から目を逸らせなかった。

「あつ、そ、そう。この人が梓の婚約者の真せんぱ」  
金髪が揺れたとしか思わなかった。

一瞬で目の前が暗くなり、鼻に香水の香りが届いて、唇に、柔らかい感触だけがあった。

「なあつ!？」

梓の悲鳴とも取れる叫び声が聞こえて、やっと何が起きたか理解できた。

女神の唇が、俺の唇に重なっていた。

目の前が明るくなり、青い瞳と目が合った時、彼女は「ふふふ」と楽しそうに笑っていた。

俺はそのまま呆然と、頭が真っ白なまま、教壇に戻るシンシアさんをただ見つめる。

「ミスターイマイズミ。用事は済みましたから今日は失礼いたしましたわ。また明日。ごきげんよう」

クラス中の誰もが、呆然と、揺れる金髪を見送る。

俺も、梓も。

キス、された。

いきなり！ 突然！ なんだこれ！ ヒャーハー！ わけわかんねー！

俺のファーストキス（俺の中で）を突然現れた女神に奪われた。

初めての、感触が残っているキスだった。

「なあんあんなあああなあなあなあんぬあああああああ  
ああんっ!!！」

梓の叫び声もよく聞こえず、俺は自然に自分の唇を指でなぞって  
いた。

初めて、だったんだ。

そして、これも初めてだった。

「先輩のばあああああああああああああああああああああ  
梓に殴られた。」

## 綺麗なおでこ

冷静になって考えれば、俺は何てことをされてしまったのだろう。初対面の、それも絶世の美女からのキス。

相手にとつてはただの挨拶だったのかもしれない。だけど俺にとつてはファーストキス（俺の中では絶対そうだ）であつて、それを見ず知らずの相手に奪われた。あの瞬間のことはよく覚えていないでも、目の前で楽しげに細められた青い瞳を思い出すと、自然に顔が熱くなってくる。

そして、梓に殴られて頬も、いまだ熱を持ったままだった。あれはグーだった。

「ぴきいいいいい！　ぴきぴきいいいぴきいいいいいっ！　ぴゃあああああああっ！」

もはや梓が何を叫んでいるのかわからない。俺にはこんなふうに聞こえただけで実際は何かしらの罵倒を浴びせられているようだった。

「梓ちゃん、ちょっと黙つてて。真から詳しい話しを聞くから」

梓の突き出た唇を摘まみながらそう言ったのは、俺の幼馴染である笹野千佳。

生まれつきの栗色の髪でミディアムショート。容姿端麗、成績優秀、運動神経抜群のすっごい奴。俺が梓に紹介して友達になった同級生。何かと気遣いをしてくれて優しい頼れる幼馴染だ。

だけど今、その優しい幼馴染の、普段の愛らしい瞳は細められ、軽蔑の眼差しが俺に向けられていた。

現在は放課後で、俺は木造旧校舎の使われていない教室にいる。いる、というか、半ば強制的に梓と千佳に連行されてきた。そして椅子に拘束されていた。以前、親友らと内密な話しをした場所だ。「いやー、噂の編入生とそんなことになっていたとはねー。ジョンも隅に置けないねえ」

長い黒髪を持ついたずらっ子、倉敷さんも当然のように千佳のオプシオンとしてここにいた。凜とした美人の見た目から想像できないほどに人をからかうのが好きで、度々痛い目に遭わされてきた。ただ友達思いで、何を考えているかいまいちわからない不思議な友達だ。

どうしてこうなっているか。

シンシアさんが教室を去ったあと、梓にグーパンチを喰らい、その梓は暴走を始めた。よほどシヨックだったのか、奇声を叫びながら俺の頭をぶんぶんぶんぶんぶん揺さぶり、気がつけば梓を止めていたのはクラスメイトだった。なんとか落ち着いた梓はそれからの授業中、ずっと俺の背中に『ウラギリモノ、ウラギリモノ』と指で呪いをかけ続ける始末。

そして昼休みを迎えると、梓は「ぴぎゃあああああつ！」と叫びながら急いで教室を飛び出して行った。それから放課後まで教室に戻って来ることはなく、HRが終わると同時に教室に現れたのは、ドス黒いオーラを放つ、梓率いる黒い三連星だった。そして有無を言わず連行され、今に至る。

「それでは、容疑者の審問を始めます」

千佳が俺を睨んだままそんなことを言った。今からいかにも何かを始めようっていう空気がなんか恐ろしい。ってか容疑者って俺は何も悪い事してないぞ。

「なあ千佳。何か誤解してるようだけど俺は」

言いかけて、驚いたことにパシンツと平手で頬を打たれた。こともあろうに千佳がそんなことをしやがったのだ。軽く叩かれたただけだけど、まさか千佳がそんなことをするなんて思っていなかった俺は面食らった。本当に、泣きそうだった。

「質問の答え以外の発言は認めません」

ひどく冷淡な声で窘められる。怖い。千佳が怖い。こんなことをいつも面白おかしそうに笑う倉敷さんでさえマジ顔で引いていた。助けて倉敷さん。俺が願うような眼差しを向けると倉敷さんは目を

泳がせた。

「で、でもお前部活は」

「部活が何だっ！」

また叩かれた。

「こほん。では質問です」

千佳の鋭い視線に俺は生唾を飲み込む。

「あなたは編入生であるシンシアさんとキスをした。間違いないです  
すね？」

「い、いや、あればふっ!？」

また平手でぶたれた。

「ハイかイイエで答えなさい」

んなこと一言も言っ  
てねーじゃねーか! とは絶対に言えない雰  
囲気だったので、

「は、はい……」

力なく、俺は答えた。

「以上、有罪決定です。死刑」

「ちょ、待っ……!」

「ぴぎゃあああああああああああつ!」

「ぎゃあああああああああああああああああつ!」

千佳の言葉を聞くなり梓が飛び掛かってきて耳をかじられた。思  
いつきり歯を立てて、本当に食いちぎる勢いで。

「痛い痛い痛い痛い痛いっ! やめるあずさあつ!」

椅子に縛り付けられたまま必死に抵抗を試みるが全く効果はない。

「そんな痛みより、梓ちゃんの心の方がよっぽど痛かったんだから。  
およよよ」冷静に泣き真似しながら言っ  
てんじゃねえ千佳!

「あれはっ! いきなりだったんだっ! 突然! ほんとっ! 俺

もびっくり! だから梓やめろ! 見てた  
だろ!」

「見てたからこそ、梓ちゃんはこうやっ  
て苦しんでるんじゃないの」

「今苦しんでるのはどう見ても俺だ  
ー!」

必死に椅子をガタガタ揺らしながら俺は叫ぶ。

その時突然、梓の噛みつき攻撃が止んだ。痛みで耳の感覚がマヒしているけど、梓はまだ離れていなかった。やめてくれたか、と俺は安堵の溜息を吐く。耳の感覚が戻ってきてわかったのは、梓が思いつき耳を舐めていることだった。いや、しゃぶっている。

「ひいひいひいひいっ！ な、何してんだ梓っ！」

「れるれるれるるじゆるる……はむはむはむ……ふふうううう」

「あ、甘噛みやめっ……息はっ……うっ……はあっ……」  
思わず変な声が出た。

うつつ、見ないで。辱められる俺をそんなに赤く染めた顔で見ないで、二人とも。

「ちよっ！ やめなさいっ！」

「れるれる……ぶはっ！」

千佳が助けてくれた。梓を力づくで俺から引き剥がす。  
も……ダメだ俺、汚されちゃった。

何かの消失感が俺の意識を支配する。

「うへへ……。良い味出してますね、先輩。ごちそうさまでした」

「ひいっ！ 寄るな変態！」

満足そうに口元を拭う梓が恐ろしかった。本気で恐ろしかった。  
うへえ、襟元まで涎でぐっしょりだ。

「まったくもうっ！ 何やってんの梓ちゃん！ そんな羨ま……じやなくてそんないかがわしいことっ！ 油断も隙もない！」

「ふ、ふーんだ。シンシアちゃんがしたことには比べればこれくらい大したことないですよ。シンシアちゃんは梓の目の前で先輩の唇を奪ったんですからっ！」

「そ、それはそうだけ……。とにかく！ し、シンシアさんに聞かないと。どうして真にキスしたのかって」

「そうですねえ。でも梓が知ってる番号には繋がらないんですよ。だから明日シンシアちゃんが学校に来てからじゃないと」

「そうなんだ。でも日本ではどこに寝泊まりするつもりなんだろう。」

そつちに連絡しちやえば？」

「こつちにもシンシアちゃんが持つてる家はいくつかありますからね。しらみつぶしに当たるといふ手もありますが、連絡するにはそれ相応の理由が必要だと思えます。個人的な用事で取り次いでくれるとも思えませんし」

「そつか。じゃあやつぱり明日にならないと話しは聞けないってことなのかな」

「うーん、まあ、そうなりますねえ」

「……………おい」

そこで俺はやつと二人の会話に首を突っ込んだ。

「なによ真」「なんですか先輩」

「お前らの今の口振りだと、俺が被害者だってわかって話してるんだよな。つまり、俺がこんな仕打ちを受ける理由は全くないってことだ！」

「キスは事実でしょ」「キスは事実じゃないですか」

お、おおう。なんだその冷たい目は。俺だってあんなことされなきゃ梓に殴られることだってなかったのに。被害者だ、俺は被害者なんだ。どうしてわかってくれないんだ二人とも。

「千佳先輩。新たな情報です。真先輩はシンシアちゃんにキスされた時デレっとしてました」

ドキッと心臓が跳ね上がった。正直なところ、あの時の俺は舞い上がっていた。あんな美女からキスされれば誰だってそうなるはずだ。俺は悪くない。この世に生きる男なら必然なのだ。

「……………ふーん。そう……………」

お、おい千佳。その握り締めている拳はなんだ。あつ、指鳴らしたら骨が太くなるって誰かが……………ちょ、振りがぶって何するの？あつ、そつか、俺を殴るんだね。

渾身の右ストレートだった。

「やあ、お目覚めかい？」

気がついた時、目の前に倉敷さんの顔があった。頭がぼーっとして、状況が良く飲み込めない。倉敷さんの顔の向こうには蛍光灯が並んでいる天井が見える。倉敷さんの長い髪がはらりと落ちて、俺の顔にかかる。倉敷さんがそれを優しく払った時、初めて膝まくらをされていることに気がついた。

「なかなか可愛い寝顔だったよ」

くすくす笑いながら言われて、急に恥ずかしくなっただけで起き上がる。と頭に鈍い痛みが走った。

「いつつ……！」

「効いたかい？　ちーちゃんの右ストレート」

「ははは……まあまあね」

起き上がって周りを見ると、梓と千佳が憮然とした態度で椅子に座っていた。人を殴って気絶させるときながら、倉敷さんに俺の世話を投げ出すとは。腹が立つ。かなり腹が立つ。俺は今猛烈に怒っている。

「おっ、お前らなあっ！」

「おっと、ジョンの膝枕役を買って出たのは私さ。あの二人はいろんな意味で何をするかわからなかったからね」

と倉敷さんがくっつかかろうとした俺の肩を掴む。訝しげに倉敷さんを一瞥して、俺はじーっと梓と千佳の二人を睨みつけた。

「ほら、ちーちゃん。あずあずも」

倉敷さんが急かすようにそう言うと、二人は急にもじもじとしてばつが悪そうに目を泳がせる。

「なんだよ」

俺が言うと、何とも言いにくそうに千佳が口を開いた。

「さ、さっきはごめんね。ちょっと……やりすぎた」

続けて、梓が言う。

「先輩、すみませんでした。あんなに先輩の耳がおいしいとは思わなくて」

「お前は悪いなんて思っただろ」

梓は一瞬顔をしかめたあと、しょんぼりとうつぶした。

「でも、先輩……梓は……本当にシヨックだったんですよ……。考  
えてもみて下さい。梓が先輩の目の前で他の男の人からキスされ  
たらシヨックでしょう？」

「いや、別に」

「ぴぎやあああああっ！」

両手を上げて俺に襲いかかる。お前、それ癖になっただけか。で  
も今度は両手が自由なんだ。そうそう思い通りにさせてなるものか。  
飛び掛かってきた梓の両手を自分の両手と合わせて押さえこむ。「  
ぬぬぬ……」「ぬぎぎ……」お互いに歯を食いしばって力比べ。こ  
いつは華奢な体つきしてるのにどうして俺と対等に張り合えるんだ。  
男だぞ俺。でもやっぱり梓は女の子で、徐々に俺が圧していく。梓  
は半泣きになってまで必死に抵抗していた。

梓と目が合う。急に梓の力が抜けたかと思えば、梓の目にはどん  
どん涙が浮かんできた。俺の両手を掴んだまま、今にも泣き出して  
しまいそうな子供のような目を俺に向ける。

「うっ……うええええええんっ！」

泣いた。驚いた。梓が泣いた。本当に子供が泣くように大きく口  
を開けて、恨めしそうに俺を見たまま、大粒の涙をどんどん溢れさ  
せる。

「お、おい、梓、泣くなよ。なっ？ ほ、ほら、もう力入れてない  
から」

「だ、だっで……！ だっで、だっでえええええええっ……！」

突然泣き出した梓に、何をしてやればいいのかもわからず、ぼり  
ぼりと頭をかいた。千佳と倉敷さんも口をあぐりと開けてほか一  
人と梓を見つめていた。

梓が泣いたのは初めてだった。今日は初めてなことばかりだ。キ  
スされて、梓に殴られて、梓を泣かせて。

梓を泣かせ……て？

一気に背筋が凍る。暑いのに悪寒が走る。泣かせた。梓を泣かせてしまった。おそらく、いや間違はなく、梓は本気で泣いている。嗚咽を漏らしながら、必死に目元を拭って、それでも涙がぼたぼたと床に落ちる。こんな時に男として情けないことだが、自己保身の本能が働いた。もしこれが、梓の父親に知られてしまった場合、最悪、俺はこの世から消されてしまう。どうしよう、どうしようどうしようどうしようっ！ ヤバイ、本気でヤバイ。

俺があたふたしていると、ガラリ、突然教室のドアが開いた。「ひっ！」「ひあっ！」

千佳と倉敷さんが小さな悲鳴を上げて飛び上がる。

夏なのに、決して黒いスーツは着崩さない、サングラスがトレードマークの梓の専属警護人、斎藤さんが現れた。身長は二メートルくらいはあるかという巨体。圧倒される威圧感。気のせいだと思いたい。椅子ミングなおここでは血管が浮き出ているように見える。「さっ、さっささ斎藤さん！ あの、こここれですっねっ！」「聞かずともわかります」

恐ろしく低くて重い声だった。

斎藤さんは俺の胸倉を掴み、締め上げる。ぜ、全然わかってないんじゃないですかね。息が詰まり、声にもならなかった。

「あつ、斎藤さん、先輩はっ！」

梓が声をかけると、斎藤さんは俺を離してくれた。乱暴に突き離され、思わず咳き込む。

「せ、先輩っ！」

梓が駆け寄り、俺の背中を支えた。

斎藤さんは軽く息を吐き、首を横に振った。

「あなたには借りがありますので、このことは私の胸に秘めておきます。それに、シンシア様のおふざけということもわかっていますから。ですが、あなたもお嬢様の気持ちをもう少し汲み取ってはいただけませんか」

そこまでわかってるなら、俺は何も悪くないってわかってるんじ

やないのか。あれは突然だったからどうしようもなかったんだ。それを寄つてたかつて俺のせいみたいな。

「あ、梓は……」

横にいた梓が、目を伏せて小さく呟いた。

「先輩は、いつでもどこでもどんな時でも、どんなに突然でも、梓とキスとか、そういうことを、拒んできて……。でも、突然だったけど、シンシアちゃんからキスされて……。それが、梓はたまらなく悲しかったんです。先輩が、シンシアちゃんを受け入れたような気がして。あれが梓だったら、先輩はきつと顔を背けてた。そう思ったら、とても、とても……。悲しくて……」

「……………悪かった」

どうしてだろう。梓の話しを聞いて、自然に口に出していた。たしかに、言われてみればそうだ。俺が言うのもなんだけど、こいつはこいつなりに頑張つてて、でも、シンシアさんはあっさりと。納得いかないよな。

「あとはお任せします」

斎藤さんはそれだけ言つて突然出て行った。見間違ひじゃなければ、笑つていた気がする。

さて、あとは梓を慰めるだけだ。

「なあ梓。あれは不可抗力だ。初対面でいきなりあんなことされるなんて誰も思わないだろ？」

「でも、梓のはいつだって……」

「それは俺がお前のことわかつてるからだろ？」

「うっ……。そ、そんなこと言われても納得できません」

……………ふう。しゃーない。梓を泣かせた責任だけでも果たそうじゃないか。

俺は梓とのやり取りを黙つて見ていた千佳と倉敷さんに背を向けた。ほんとは、とても人前でできることじゃない。これはただの責任だ。梓が喜ぶことをしてやるだけ。それはわかっているから。

俺は梓の前髪を払い、額にキスをした。梓は「ひゃっ」と可愛い

悲鳴を上げた。

やって恥ずかしくなった。梓が俺を見上げているのがわかる。だけど俺はその目を見つめ返すことができなくて、ただただ目を泳がせた。

「お、俺からこんなことするのは……お、お前だけだからな」  
「こけっ!？」

梓がまた変な叫び声を上げた。どんどん人間離れしていくなこいつ。

「ま、また勘違いする前に言っとくけどな、好きだからとかじゃなくて、こんなことできる相手ってのは、お、お前しかないってことだからな」

「う、うひっ。うひひひっ。せんぱい、それ、どう意味が違うんですかあ？」

「だ、だから、俺がこういうのを千佳とか、倉敷さんとか、もちろんシンシアさんにもすることはないってことだ」

「ま、いいですけど。梓が特別だったことはわかりましたから」

ぐいっと、無理矢理俺の目の前に顔を突き出してにんまり笑う。

泣いてる顔も新鮮だったけど、やっぱりこいつはこういう顔が一番似合ってる。

「何か良い具合に締めようとしてるけどね、やってくれるじゃない、真」

振り返ると、鬼がいた。

「よくも私の、じゃなくて私たちの前でそんなにいちやつけるものね。言っとくけど梓ちゃん！ 真のファーストキスは小さい頃に私が奪ってるから!」

「はあ？」

びしっと梓を指差して言う千佳。また何を言い出すんだ。俺はまったく覚えてないけどな。

「へー、そうですか」

「ぐっ……………くうっ!」

それを梓は軽くあしらうように言う。千佳は悔しそうに地団太を踏んだ。だからお前らは何でそう競い合いたがるんだ。

「ま、まあまあちーちゃん。とりあえずよかったじゃないか。何やらジョンがああ黒服の人に連れて行かれそうだったしさ。丸く収まったということで」

「う……うん。そうだね。思ってたより、真って大変なんだって思った」

「わかってくれて助かるよ千佳」

「でも、真先輩は自分の意思で梓におでこキツスをしました」

「むむっ……！」

「話を蒸し返すな！」

まったく、こいつは、こいつらはっ！

「で、梓、あのシンシアさんって何者なんだ。お前がいるって聞いて来たって言うてたろ」

同じ繰り返しになりそうだったので無理矢理に話しを変える。多分、さつき話していた様子だと千佳も気になってるようだったし。

「まあ、そう言うてましたけど、目的は不明です。何の連絡も受けてませんでしたから。いつも来日する時は迎えに行くんですけどね」  
梓は顎に手を当てながら考えるように言う。

「たしか前にアメリカの友達って言うてたよな」

「ええ、まあ。友達、ですね」

釈然としない言い方だった。

「なんだ、仲が良いわけじゃなかったのか？」

「仲、良いですよ。小さい時は、よく、遊んでもらってましたし」  
口元だけ笑って、目が笑ってない。歯切れも悪い。何か触れてはいけないものに触れているような気さえしてきた。

「とても仲が良いふうには聞こえないんだが」

「あはははー。そ、そんなことないですよ。あれでもシンシアちゃんは子供の頃やんちゃですね、一緒にお庭で遊んだりしてたんですよー？」

「へー。全然そんなふうには見えなかったけどな」  
そこで千佳が身を乗り出してきた。

「ね、真。シンシアさんってどんな人だったの？」

「そうだな……。一言で言うなら、女神だ」  
殴られた。

「お前全然反省してないだろ！」

「ハッ、ごめん。つい反射的に」

「夫婦漫才はいいから、あずあずの話しを聞こうじゃないか」

倉敷さんが大人だ……。いつもは率先して人をからかうくせに。

しかも夫婦漫才とか言ったら梓がまた突っ込んできそうじゃないか。  
でもその梓は、うつろな表情で何かを一人でぶつぶつ呟いていた。

耳を澄ますと、

「……………ひひーん……………ひひーん……………」

……………馬の、鳴き真似？

「梓？」

「……………ひひーん……………」

梓はぼーっとしていて、どこを見ているのかわからなかった。目の前で手をひらつかせても反応しない。ぺちぺちと頬を叩いてもひたすら「ひひーん」と繰り返して呟いていた。

梓が壊れてしまった。

「これはあれだね、一種のトラウマなんじゃないかな」

倉敷さんが梓の頬をちょんちょんつつきながら言った。

「トラウマ？」

「うん。この名探偵が察するに、おそらくは小さい頃にシンシアさんがあずあずに馬乗りになって遊んでいたと。それで、あずあずは言われるままに馬の真似をしながらシンシアさんに乗せてまわった」

それはいくらなんでも無理がある推理だと思うけどな。あの梓が人を背に乗せて這いつくばってたってことだろ。想像できない。どつちかと言えば梓が乗っかる方だと思う。

「とにかくジヨン。あずあずを呼び戻すんだ」

「俺が？ どうやって……。何しても反応ないし」

「あずあずの耳元で囁くんだよ。俺がお前に馬乗りになって犯してやるぜって」

「言えるかっ！」

「冗談だよー。そう怒らないでくれよ」

「せ、先輩が、梓に馬乗り……。？ うへへ……」

「ほら、戻ってきた」

嘘だろ……。梓、お前どれだけ変態なんだよ。

「あ……。先輩がいる……。どうぞ、梓の全てをむさぼり尽くして下さい」

「そのままどつか行ってんじゃねえ」

梓の頬をつねって夢から解放してやる。梓は「いひゃひゃ」と言いながらとろんとしていた目をぱちくりさせた。それから辺りを見回して「あー……」と肩をがっくりと落とした。

「梓ちゃん、ひひーんとか言ってたけど」

千佳の言葉に梓がびくりと反応する。そして「あうあうあ……。……」と顔を真っ赤にさせてうつむいた。

「つ、ついに知られてしまったのですね。梓の秘密を」

秘密だったんだ。まあ「ひひーん」なんて言うところを人に見られたくはないよな。

「シンシアちゃんには、ほんとによく遊んでもらってました。時には梓が馬になり、時には梓が犬になり、時には……。あうっ」

「お前、それ……」

「いいのです。わかっているのです。でも、梓には遊んでもらうと思うしかなかったのです」

梓は遠い目をして儂げに呟いた。何かを諦めているようにも見えない自嘲気味な笑い顔を浮かべて。

「らしくないじゃないかあずあず」

「ほんと、梓ちゃんじゃないみたい」

二人の言う通りだった。いつもは何でも思い通りになるような傲

慢さのある梓が、どうしようもなかったような言い方をして。

「どうやら、梓はあのシンシアさんにいじめられていたようだ。倉敷さんの名推理が当たっていた。ありえないと思っていたのに。絶対人の言いなりにならないような梓が。我が儘お嬢様が。聞いた今も現実味が湧いてこない。」

「どうしてそんなことされてたんだよ。お前の親父さんに告げ口すればよかったのに。どうにかしてくれそうじゃん」

梓は「ふう」と小さく疲れ切った溜息を吐いた。

「我が神宮寺グループは、国内企業の、実に七割と何らかの関わりを持っていきます。シンシアちゃんの母親であるカトレアさんが持つアネソングループはアメリカで四割のシェアを占めています。そういうことですよ」

「そういうことって言われてもな。」

「逆らえない、ってことか？ 七割なら、お前んちの方が力は上に思えるけど」

「この際、単純な国土面積で考えてもらって結構です。日本の七割と、アメリカの四割。どちらが大きいと思いますか？」

「……………実にわかりやすい例えだな」

「はあ。俺は溜息を吐く。世の中上には上がいるもんだ。千佳と倉敷さんも今のを聞いて呆気に取られている様子だった。」

「子供は子供なりに、お家事情はわかっているんですよ。うちの海外取引先はほとんどカトレアさんのところですよ。梓も昔は活発な方じゃなかったですからね、大人しく言う事を聞いていただけです」

「泣き寝入りってことか。金持ちの世界には金持ちの世界のしからみがあるんだな、そんな子供にまで。」

梓もいろいろ苦労してきたってわけか。

「その、世界屈指のお嬢様シンシアさんがうちの高校にやってきた。おそらく、その権力を使い、梓がいるクラスへ。ここまで聞いてまさかと思っただけだ、」

「シンシアさんって、お前をからかうために来たとか？」

「その可能性は否めません。だけどわざわざそのためだけに来たというのにも疑問が残ります。もうそんな子供というわけでもないですから。シンシアちゃんもグループの役員ですからそんなに暇じゃないでしょうし」

梓は首を横に振りながら言う。お前は暇そうなのにシンシアさんは立派だな。

「でもさ、そう考えると、真にキスしたのだから納得できるんじゃない？ 梓ちゃんに対する嫌がらせとか」

「ずいずいっと千佳が人差し指を立てながら割って入る。

「手始めにジョンを奪ってやるうってことかな」

「おもしろそうに倉敷さんがくらくらいついてきた。

「そ、そんなことは絶対にさせません！」

「でも、それはジョン次第なんじゃないかな」

倉敷さんが揶揄すると梓はキツと俺を睨んだ。

「わかっているわかってる。つーかなんであの人は俺のこと知ってたんだよ。お前が教えたんだろ？ そもそもそのせいで今回のことがあったわけで」

「それが不思議なんですよ。梓は好きな人がいるって一度話しただけで真先輩の名前も教えてませんし、写真なんかも見せていませんから。随分と連絡も取っていませんでしたし」

「えっ……」

それ怖っ！ なんだよそれ、俺と梓がどこかで見られてたってこと？ 監視されてるとか。いや、学校では俺と梓は目立ってたし、誰かに聞いたのかもしれない。でもそれだと、嫌がらせをしようとかわざわざ日本に来た理由にはならないし。わざわざ神宮寺家に問い合わせでもしたというのだろうか。

「理由はどうあれ、シンシアちゃんは実際に学校に来ましたからね。

梓は、これからがちょっとだけ心配です」

梓はほんとにシンシアさんが苦手なのか、大きく嘆息した。梓が臆するほどの大物なんて、世界は広いねえ。

「まあ困ったことがあれば相談しておくれよ。私でできることなら力になるうじゃないか」

意気消沈としている梓の肩をぼんぼん叩いて倉敷さんが言う。

「そうだね。私もシンシアさんの事は気になるし。ま、また今回のようなことされたら困るもんね」

しゅっしゅっつとシャドーボクシングをしながら千佳が言った。お前、それ俺を殴る練習じゃないのか。

「だいたい何で俺は千佳に殴られたんだ。千佳は別に困らないだろ俺が言つと、千佳は「ふえっ」と驚く。

「こ、ここ困るでしょ！ なんとなく！ そ、そうよ、真が困つたら私だつて困るの！ 幼馴染なんだから！」

「ふーん……」

そんなものかね、幼馴染つて。

「ジョンはねえ、だからジョンなんだよ」  
ペット？

それから倉敷さんは「遅くなつたけど部活に顔出すよ」と言っておもむろに鞆を手に取り、千佳は「私も！」と言いながら倉敷さんより先に教室を飛び出して行った。そんなに慌てるくらいなら最初っから部活に行つてりゃいいのに。倉敷さんは「これも私のお務めだ」とか言いながら出て行った。

「あいつら、結局何しに来たんだ」

「ふふふ、そういう先輩、素敵です」

二人の出て行った入口を見たまま、梓がほくそ笑んでいた。

「俺たちも帰るか」

「はい。ところで先輩。先輩の部屋の鍵は付け替えたりしてませんかよ？

「ああ、してないけど……お前、何するつもりだ」

「いえ別に」すました顔で答える。

「内鍵は別に取りつけてある」

「そ、そうですか……」

あからさまに落ち込む。どうせキスの上書きとか言って寝込みを襲うつもりなんだろ。

「さっきので勘弁してくれよ」

「じゃ、じゃあひとつだけ我が儘言ってもいいですか？」

「……なんだよ。言うだけ言ってみろ」

「も、もう一回、おでこに、ちゅつと、お願いします。ほつぺでもいいですよ。でも本当は唇がいいんですけど。あっ、なんなら首とか胸とかお腹とか！ もうちゅつと許されるなら」

「わかった！ わかったから！」

エスカレーターする前に止めないと。あれくらいで本当に梓の気が済むんないいだろ。今度は人の目もないし、気は楽だ。

そして俺は梓の前髪を払う。形のいい、綺麗なおでこ。どういう意味かはわからないが、つまりデコピンに適しているということだ。梓は嬉しそうに俺を見上げる。そんなに見るなって照れるから。こういうことを平気しようとしてくるお前ってやつばすごいわ。梓は「早くー」と言いたげに鼻をふんすか鳴らす。そんなに期待されたらやりにくい。躊躇して梓の額から目を逸らす。「隙ありー！」と俺の唇めがけて飛び上がるうとした梓を「隙はない」と額の手で抑え込む。それに紛れてちゅつと、軽く額にキスをした。

「はい終了。帰るぞ」

「えっ。えええええっ！？ 今ので！？ 今ので終わり！？ 梓全然わかんなかったです！ 卑怯ですっ！ もーいつかい！ もーいつかい！ もーいつかい！」

「なっ？ やっぱり俺はお前のやることなんてわかってるだろ？」

それだけ一緒にいるってことだ

「もっ………！ ……ず、ずるいです。そんな言い方」

そう言いながらも、梓は照れ笑いを浮かべて、定位置についた。左腕が、窮屈になる。

「さー帰ろうぜー」

なんだかんだで殴られ損だった気がする。だけど梓の意外な過去

を知ることになった。前に梓が小さい頃おとなしかったって聞いたときも想像できなかったけど、今回のことはいまだに嘘なんじゃないかって思ってる。

何でも思い通りになるくらいのアラゆる力を持っている神宮寺梓。その梓に馬乗りになるお嬢様。世の中のことがわからなくなっていくよな。俺が垣間見たお金持ちの世界つても、ほんのごく一部にすぎないんだ。これから、シンシアさんは何をするつもりなんだろう。何を起こすつもりなんだろうか。ほんの数分で嵐を巻き起こして行ったお嬢様のことが、少しだけ怖かった。

梓も心配だと言った。一番不安なのは梓なんだろう。梓が困るところがあるのなら、少しくらい気を楽にさせてやりたいとは思う。だからって、金も力もない俺にできることは限られてる。おでこにキスとか、そんなもんでもいいさ。俺じゃなきゃできないことだし。こうやって腕を組んで、梓の居場所を提供してやることだったな。

「先輩は、梓のことであってないことがたくさんありますよ」

「んー、そうか？」

「梓はどこが感じるとか、梓の汗の味とか、梓のあんなとこの匂いとか」

「知りたくもないわっ!」

梓は悪戯っぽく「にしし」と笑う。

「梓がどれだけ先輩のこと好きか、とかもですよ?」  
知りたくも、ないことないかもな。

## 黄昏の別れ

翌日、シンシアさんは学校に来なかった。ということにしておけば俺も何も考えずに過ごせていたのかもしれない。

朝、シンシアさんが教室に来るなり、教室の入り口付近でたむろしていたクラスメイトはさささと道を開けた。俺と梓が通る時に腫れものに触らないように道が開かれるのとは違う。王女様のために道を譲るように、すつと身を退く。偉人のような扱いだった。それが当然のようにシンシアさんも進む。ブロンドを揺らし、気品のある歩き方で、真つすぐに梓に向かってきた。

授業中に机の前に置かれたスタンドミラーを見ると、梓は「あ、は、は」と苦い顔をする。

梓が俺の顔が見えるようにとどこかから引つ張ってきたスタンドミラーは、今現在、梓の机の前に置かれていた。梓の机の前にあるスタンドミラーを俺が見ることができるのはどういふことか。それは、俺の後ろの席にはシンシアさんがいるからだ。俺の位置はそのまま。梓が俺の前に来て、自分の机の前にスタンドミラーを置いた。それが、一時限目の授業の前の出来事。シンシアさんが強要したわけではない。澄んだ美しい声で「アズサの場所、いいですわね」と言っただけ。それだけで全てを理解した梓は何も言わずに席を譲り渡した。それで迷惑被ったクラスメイトが一人いる、はずなんだけどこのクラスの人数は今までと変わらないままだった。シンシアさんはただの編入生ではなく、交換留学生ということらしい。山下くんが消えていた。彼のことだからそれ相応の金額を積まれて喜んで旅立ったことだろう。

それ以外は別にどうするわけでもなく、休み時間には梓と金持ち世界の他愛もない話しをしたりするだけ。俺に特別構うというわけではなかった。

あのキスの意味は何だったんだ。本当にただの挨拶だったんだろ

うか。梓とシンシアさんは、世界が違う近寄りがたい雰囲気醸し出し、話題の編入生だというのに誰も話しかけたりしなかった。他のクラスからは興味本位に教室を覗きに来る生徒もいたけど、感嘆の声を上げて眺めては帰って行くだけだった。

話題性は抜群だった。歩く度に光を撒き散らし、笑う度に誰かの心を射抜く。黄金の女神、クラスメイトたちはそう呼んでいた。

そして、誰も落ち着きがないまま、昼休みを迎えた。

「ランチを一緒にいかがでしょうか？」

突然「マコト」と呼ばれて振り返ると、シンシアさんは机に頼杖をつき、まるで俺を試しているかのように、薄い笑みを浮かべてそんなことを言ってきた。

直接間近でこの人を見てしまうと心が飲みこまれてしまいそうになる。自分でも気がつかないまま物語にのめり込むような、現実味のない美貌がそこにはあった。

「あ、お、俺は弁当があるから」しどろもどろになりながら、かろうじて口にする。

シンシアさんは「ふふふ」と笑い、「わたくしもお弁当がありますの。ここは騒がしいので、静かなところで、二人で食べませんか？」と包みを一つ見せる。てつきり校外で食事するものと思った。

普通にただ一緒に食べようって誘ってるだけなのに、俺はなんて答えてるんだ。慌てているのが丸わかりで恥ずかしい。

「でも、梓が……」昼はいつも一緒に食べてるから。

梓を見ると、不安そうな眼差しで俺を見つめていた。だけどその眼球に映るのは諦めの色。

「あ、梓は、あの……」

言いにくそうに、目を伏せる。影に隠れたその手には、弁当の包みが握られていた。シンシアさんがどういう人か俺はまだ知らない。今まで見ていたところ、梓が勝手に恐縮しているだけのように見える。だから、俺は言った。

「シンシアさん、梓も一緒にいいかな？ いつも一緒に食べてるん

だよね」見えないように、虚勢を張る。このあとの反応が少し怖かったのだ。梓よりも力を持っているシンシアさん。これは、口答えになるんだろうか。

「あら、どうしてアズサの名前が出るのかしら。わたくしはマコトをお誘いしましたのよ？　ね、アズサ」

決して笑顔は崩さない。でもそこに隠れきれない威圧。そしてそれは、梓に向けられていた。

「あの、先輩……今日は」

「梓は、俺がいつも一緒に食べようって誘ってるんだ。シンシアさんは俺を誘って、俺は梓を誘ってる。だから、三人で、いいよね？」……ええ、そういうことでしたら、構いませんわ。どこか静かなところへ案内して下さるかしら」

「うん。どこでもいいのかな？」

それにシンシアさんは笑顔で答え、俺は梓の手を引いて教室を出る。周りの生徒から向けられる奇異の視線が久しぶりだった。両手に花。それもお嬢様が二人。俺は何者なんだよ、王子様でも何でもないってのに。

向かう先は旧校舎の空き教室。屋上も解放されてはいるけど、人気の間所だから。風に当たられて気持ちが良いだろうけど、静かな場所じゃない。

空き教室に入り、机を三つ繋げた。梓とシンシアさんが向き合っ  
て繋げ、俺がその横に位置する。そして、まず弁当を広げたのはシンシアさんだった。サンドイッチか何かと予想していれば、普通の弁当だった。おかずは洋風だけど、白米もあつた。色合いや見た目はさすがに立派だけど、一般家庭の少し手の込んだ弁当のようだった。

「何か、普通なんだね」

思わず口にする。シンシアさんは「まあ」と少し驚いた声を上げた。それから少し呆れたように笑う。

「もう。マコトは、わたくしを何だと思っていますの？」

「いや、えつと……」生粋のお嬢様？

「以前、うちのシェフに料理を教えてもらいましたの。これでもうまく出来た方ですよ？」

「え、手作り？」

「そうですね。ふふ、お弁当を作るといっものは、思っていた以上に心が躍るものでしたわ」

品のある笑い方の中に、子供っぽさが見え隠れする。

それから梓が弁当を開く。毎日シェフが作る弁当で、普通に買えばいくらかわかったもんじやない弁当だ。俺は母さんが作ってくれている弁当。食べ慣れた、家庭的な弁当だ。

「アズサは、相変わらずですね。料理のひとつでも嗜んでおかないと、殿方は振り向いてくれませんか？」

「あ、これは梓が」

「変な意地張るな。すぐにボロが出るくせに」

「うっ……」

「ふふふ……。聞いていたよりも仲がよろしいようですね」

シンシアさんは箸を器用に使ってオムレツを一口サイズに切って頬張る。生まれが日本だと聞いても疑いようのないくらいだ。その様子を見ると、随分距離が近い存在に思えた。緊張が、やんわりと薄らいでいくのが自分でもわかる。だからその一言にも、自然に踏み込めた。

「聞いていたって、誰に？」

「ふふつ。いろんな方面から、お噂はかねがね」

もう一口のオムレツと共に、はぐらかされる。梓はマイペースで仲が良いと言われたからか照れていた。俺はからあげを頬張りながら、考える。シンシアさんは明らかに接近してきている。だからって自分のことは明かそうとしない。何か思惑があつてのことか。ただの興味からなのか。俺たちが思っていた通りに梓をからかおうとしているのか。

「シンシアちゃん。今回は、どうして日本に？」

梓は箸を止めて、不安そうに尋ねた。それが核心に迫る質問。あのキスの意味だって、そこにあるかもしれないんだから。

「アズサに会いに来たのですわ。最近ちっとも連絡がなかったものですから。それでお話しを聞いたところ、熱を上げている男性がいらっしゃるとか。以前にアズサから聞いていた方。うふふ、想像通りに素敵な方でしたわ」

色っぽい流し目で俺を見る。キスを思い出して、顔が熱くなった。シンシアさんは俺が考えていることに気がついたのか、薄ら笑みを浮かべて指で自分の唇をなぞった。あの、小さくて薄い唇が俺の唇に、キス、したんだよな。ダメだ、考えたら。飲み込まれてしまう。「だ、だから、キスしたの？」

突然、梓が声を張り上げた。顔は下を向いているが、頑張って、上目でシンシアさんを見る。

「先輩のこと、素敵だなんて、お、思ったから……？」

そして梓は黙る。黙って、シンシアさんの答えを待つ。両手は膝の上でぎゅっと握られて、唇は固く結ばれている。まるで何かの覚悟をしているように。お前は、シンシアさんが「そうだ」と答えたらどうするつもりなんだ。お前はシンシアさんに逆らえるのか？自分と、神宮寺家を巻き込んで。

シンシアさんは軽く息を吐いて、軽い口調で言う。

「あれは、ただの挨拶ですわ」

ほっと胸を撫で下ろす俺と、ほんの少しだけ落胆した俺がいた。ただの挨拶、か。そんなもんだよな。でも、よかった。これなら梓とシンシアさんが揉めることなんてないだろう。最初のだけ、梓が我慢すればいいことなんだ。ただ梓は納得していないのか、恐れを含みながら細々と言う。

「本当に、ただの挨拶？」

「ええ。そうですわ。挨拶、ですわ」

「……学校にまで編入してきて？」

「それは、アズサと同じ学校に行ってみたかったですわ」

「……ん、なんとなく……わかった」

梓はそれ以上の追及はせず、黙々と弁当を口に運ぶ。俺も、シンシアさんも、それで会話が全て終わってしまったように、淡々と食事を済ませる。

静かなところと言われたけれど、これじゃあいたたまれない。何かと話題を探すのに、脳を働かせる。でも俺に出せるのは、何のボキャブラリーもない質問だけだった。

「えっと、シンシアさんって、梓と同年？」には見えないけど。

「わたくしは今年で十八になりますわ」

「えっ、一つ上？」

「そうなりますわね」

またまた変な感じだな。クラスメイトなのに、先輩と後輩がいる。それにしても十八でここまでの気品と色気が出るものなのか。おねーさんだからそう感じる？ 違う違う、住む世界が違うんだよなやつぱり、この人も。じゃあ、敬語を使わないとならないのかな。

「日本にはもう何度も来てるんですか？」

「ええ。和食も好きですよ？ 箸の使い方、上手でしたでしょう？」

「ああ、そうですね。日本語もうまいですし」

シンシアさんは、面白そうにクスクスと笑った。

「その話し方、おかしいですわ、マコト。先程と同じようにお話しになって？」

年相応、の笑顔かな。その中にも気品だけは残る。梓と違うのは、お嬢様という先入観があってもなくても、シンシアさんはどう見てもお嬢様っていうことだ。

何となくだけど、うまく付き合っていけそうな気がしてきた。梓に馬乗りになって遊んでいたと聞いていたから、もつと傲慢で我が儘な人かと思っていたけれど、そういう雰囲気も今は見て取れない。ただ梓に会いたかったから来たと言われても、今なら納得できてしまう。席を梓が譲ったのも、梓が過剰に警戒していたせいだと思え

るし。

「先輩……」

梓が唇を尖らせながら制服の裾を掴まってきた。

「ん、どうした？」

俺が言うと、梓は唇を尖らせたまま「うっ、うっ」と唸る。梓猫構って欲しいサイン。俺がシンシアさんとか話していないのが気に入らないのだろう。安心して、甘えたくなつたのだろうか。シンシアさんと対照的で、子供っぽい。だから、甘やかしてしまうのかもしれない。

「帰り、どっか寄ってくか？」頭を撫でながら、ご機嫌を覗う。

「はいっ！」

いつもの梓だ。もうこいつも大丈夫そうだな。ここは、シンシアさんにこの時間のおかえしをしないと。

「シンシアさんも、どう？ 特別に何をするっていうわけでもないけど」

梓の手に一瞬力が入る。でもそれは本当に一瞬で、「一緒に遊ぼうよ」とシンシアさんにぎこちない笑みを向けた。シンシアさんは軽く微笑み、首を横に振る。

「わたくしは遠慮しておきますわ。やることもありますし、何よりお二人の邪魔になるでしょうから」

「そんなこと……」

ない、と言おうとして口を噤んだ。やることがあるなら仕方がない。グループの役員らしいし、忙しい身分なんだろう。

「一つだけ……」

シンシアさんは人差し指を立て、ウインクをする。

「マコトに大事な話がありますの。アズサ、席を外して下さいさる？」

「えっ、どうして真先輩に……」

梓の表情が強張った。嫌なことを思い出したような、そんな顔をした。

「アズサを大事にして欲しいと、少し注意をしておきたいのですわ。

あなたに聞かせるような話しでもありませんのよ。心配しなくても、すぐに済みますわ」

梓は不安そうな眼差しを俺に向ける。話すだけなら、なんてことはない。距離を置いて話せば昨日のようなことにもならないだろう。

「大丈夫だ。先に教室に戻っててくれるか？」

「で、でも……」

「安心しろ」

頭を撫で、笑いかける。それでも躊躇う梓の耳元で「またおでこキツスしてやるから」と囁いた。その瞬間梓の表情が輝き、すぐに戸惑いの表情になる。そしてまた目を輝かせ、戸惑い、その表情を交互に繰り返しながら、教室を出て行った。面白いほどに表情を変化させることを改めて認識した。

梓が出て行って、ひとときの間。シンシアさんは入口から外を覗き、梓が行ってしまったことを確認して、俺に向き直った。俺とシンシアさんの間には、机三つ分の距離がある。

「えーと、話つて？」

シンシアさんは壁に寄りかかり、豊満なバストの下で腕を組んだ。それが何となく高圧的に見える。

「さっき言っていた通りアズサのことですわ。大事になさっているようですわね」

「大事っていうか、まあ、それなりに」傷つけると怖いから。

「本当、仲が良さそうに……。見ているわたくしが、妬けてしまうくらいに」

シンシアさんは目を細め、腕組みを解いて近寄ってくる。それに合わせて、距離を取る。警戒しておくにこしたことはない。梓の目がないとはいえ、昨日のようなことになったら困る。まだまだ信用しているわけではないのだ。

「ふふ、昨日のこと、気にしてらっしゃいますの？」

「そ、そりゃあ、ね。あのあと結構大変だったんだよ。殴られたり、噛みつかれたり」

「それは申し訳ないことをしてしまいましたわね。ですけど、あなたはどうでしたの？ わたくしからの、キスは」

シンシアさんは艶っぽい微笑みで、自分の唇をなぞる。金色の髪が、光を撒き散らす。見とれてしまわないように、自分から目を逸らした。

「どうもごもないよ。あれは、挨拶なんだし」

「ふふふ。それはいいとして、今日は少し面白い趣向をご用意していますの。その窓から外を見て下さる？」

外……？ この旧校舎は職員用と外来用駐車場に面していて、この教室はその二階にある。窓から見える眺めはその駐車場だけ。誰か呼んでいるのだろうか。もしかして、斎藤さんみたいな人が警告でも発しているんじゃないだろうか。俺は少しだけ緊張しながら窓から駐車場を見下ろした。

「？ 何もないけど……？」

そこにはいつも見える車が数台停まっているだけで、特に目新しいものはなかった。普通の車が停まっていて、高級車が重鎮しているわけでもない。

「もつと下の方ですわ。覗きこまないと、見えないかもしれませいわね」

「下？」

訝しくシンシアさんを見ると、変わらず目を細めて「うふふ」と笑っているだけだった。何があるのかわからないけど、とにかく面白い趣向というものを見てしまわないことには帰してくれなさそうな雰囲気だ。仕方なく、俺は窓を開けようと鍵に手を伸ばす、とふわりと香水の匂いが鼻にかかり、同時に背中に柔らかいものが触れた。そして、俺の胸には、綺麗で細長い白い腕が回される。ハグされた。後ろから、シンシアさんに抱き締められている。

「ちよ、ちよちよちよっ!？」

「これがマコトの匂いですね。うふふ、マコトったら、ずーっとわたくしを警戒しているんですもの。嘘でも吐かないと隙を見せて

いただけませんでしたから」

「えっ、じゃあ窓の外には……」

「何もありませんわ。そもそもマコトがこの場所に案内してくれたでしょう?」

こんの、金持ちお嬢様つてのはどうしてこつても悪知恵が働くんだ！ それとも俺が騙されやすいだけなのか。とにかく離してもらわないと。

「は、離して、シンシアさん。こういうのは、よくないから。いろんな意味で俺ヤバイから」

そう言つと、背中に柔らかい双丘が押しつけられる。ふに、ふわ、何が何だかわからない。少し動けば形が変わるその柔らかさは未体験の域だった。

「どうか、シンシアとお呼びになって?」

「い、いや、それは……」

「興奮していますの? 胸の動悸が激しいですわよ?」

シンシアさんの手が俺の胸に当てられる。背中にもシンシアさんの鼓動が伝わる。どっちが自分の心臓の音かわからない。

「わたくしのこと、どう思います?」

言いながら、その手はだんだんと上へ向かい、俺の頬に添えられた。荒く息が漏れて、頭が真っ白になる。

「ど、どどどどうつて、み、魅力的、です。き、綺麗、だし」

「うふっ。嬉しいわぁ」

さらにきつく抱き締められて、足まで絡めてきた。白い手と足が、色っぽくて、抵抗すら忘れてしまう。

「あなたとアズサのこと、聞きましたわ。困っているそうですわね。日本の男性は頭が固いですもの。アズサが認めているのなら、それで構わないのに」

この話し方だと、本当に俺と梓の父親の関係を知っているようだ。

「は、話したかったことつて、それ?」

「ええ、そうですわね。単刀直入に申しあげます。マコト、わたく

しとお付き合いたしましょう。もちろん、ガールフレンドではなく、恋人として」

「はへっ!?!」

わ、悪い冗談だ。いや、悪いわけじゃないけど、こんな美人、いや天使、いや女神が俺と……ってダメだ何考えてるんだ俺。んなことしたら梓の奴は泣くどころじゃ済まない。梓自身に殺されるかもしれない。そもそもこんな人が俺と付き合おうなんて絶対おかしい。何か裏がある。

「か、からかおうってしたって無駄だよ」

「からかう? 何もわかっていませんのね、マコト。わたくしはあなたのことを好きになってしまったのですわ」

「す、好きだなんて、そんなことあるわけないよ。昨日会ったばかりだし、まともに話したのも、今日だったし。お、俺のこと好きになる理由なんてない」

「一目惚れ、信じます?」

「し、信じない信じない! それこそありえない!」

「強情ですわね、マコト。わたくしが、こんなことまでしているのに」

抱き締められたまま、足を絡ませたまま、俺の肩にシンシアさんの小さい顔が乗っかる。そのまま首筋に軽くキスされた。

「うっ……」

「ふふ、可愛い。わたくしたちの世界では、何がものを言うと思います? 頭のキレ、行動力、交渉術、どれも違いますわ」

そのまま耳元で囁かれる。そんな質問に答えられるほど余裕がない。男としての理性が崩れかけている。熱い。体の芯から熱がこみ上げてきているようだった。

「直感、ですわ」

「ちよ、直感?」

「ええ。嗅覚と言ってもよろしくてよ。わたくしの母も、わたくしも、特別に何が優れているというわけではありませんの。己の勘を

頼りに今を築き上げてきましたわ。あなたにも何かを感じましたの男として。あなたはわたくしといれば素晴らしい男性になれるすわわたくしの勘がそう告げていますの。そして、きっとあなたは、情熱的にわたくしを愛してくれる」

「か、勘なんて、ますますもって怪しいね」

精一杯の強がりだった。できることなら今すぐ振り向いて思いつきり抱き締めたい。欲望を必死に堪えて、理性を保つ。

「わたくしと、こんなこと、それ以上も、マコトが好きなることを、わたくしにしていいんですのよ？　いつでもどこでも、あなたの望むカタチで、わたくしを好きになさって構いませんわ。素敵なことだと思いませんか？」

甘美な誘惑が、耳から頭に入り込んでくる。執拗に押しつけられるシンシアさんの胸。それでもどうにか理性を保つ。こんなことが起こっていいわけないんだ。それに俺には梓がいる。どんな誘惑であれ、俺には梓を置いて他の人と付き合うなんてできないんだ。今だって梓に見られてしまえば俺の命は相当危険になる。それが理性を保っている最大の理由だ。

「ただ、決定的とも言える一言が、シンシアさんの口から囁かれた。」

「アズサのおじさまも、わたくしがどうかして差し上げますわ。あなたに手を出さないように言えば済むことですもの。わたくしのお母さまは相手が誰であろうと、わたくしが選んだ人ならば受け入れてくれますわ」

……そうだ。シンシアさんの力は梓より、神宮寺家よりも上。シンシアさんと恋人になれば、あの父親を黙らせることができる。俺は今のしがらみから解放放たれる。梓のご機嫌取りに精を出すこともなくなつて、何も悩むことすらなくなるんだ。それにシンシアさんの美貌。誰も彼も目を奪われる美しさ。それを俺のものにできる。これ以上、何を我慢することがあるのだろうか。

「し、シンシアー！」

俺は振り返り、シンシアさんを抱きしめようとする。しかし、女神はするりと俺の腕をすり抜けた。

シンシアさんはブロンドを翻し、嬉しそうに微笑んだ。

「うふふ、それでいいのですわ、マコト。でも、続きは恋人になつてから。アズサのおじさまにはわたくしが話しておきますから、あなたはアズサに直接お話しになつて？」

「えっ……」

う、うん、そうだよな。こういうことは、本人を前に直接話さないといけないことだろう。

……いやいや待って待って俺。

何かシンシアさんと付き合うみたいになつてるけど、それで本当にいいのか？

「それではマコト。わたくしは先に教室に戻りますわね」

「ちょ、ちよつとまつ……」

教室を去るシンシアさんの背中を見つめたまま、俺はぼーっと立ち尽くしていた。

何か、流されてしまった感が否めない。

本当にこれでいいのかなんて、いいに、決まってるよな。これで全て丸く収まる。俺は晴れて恋人ができて、この先きつと楽しい生活になることだろう。梓だって、俺以外の、父親が認める相手を見つけた方が幸せになれるに決まってる。

自分に言い聞かせようとしていた。これでいいんだって。

教室に戻ったのは、午後の授業が始まるギリギリの時間。

教室に入ると、梓がシンシアさんと何か話していた。見た感じではシンシアさんの口からさっきのことを話した様子はない。梓は俺の姿を見ると、安心したように自分の席に着いた。

午後の授業中、ずっと考えていた。

これまでの梓とのことや、これからの梓のこと。俺が梓に紹介し

た友達と、その友達とのこれからの関係。

我が儘なお嬢様に付き合わされて、大変だった。それがもう終わろうとしている。

梓に伝えるだけだ。

シンシアさんと付き合うからって。

震える。体が震えていた。単純に、怖い。梓にそう伝えるのが怖かった。

昨日のキスだけで梓はあんなに泣いたのに、俺がこれから伝えることを口にすれば、どれだけ梓を悲しませることになるんだろう。

昨日のように泣くのだろうか。それとも、泣けなくらいに傷つけてしまうのだろうか。

梓と付き合っているわけじゃない、恋人同士っていうわけじゃないんだ。それなのに、どうしてこんなにも苦しい思いをしなければならぬんだろう。

梓のことは嫌いじゃない。なんだかんだで可愛い奴だし、甘えてきてくれるのは、やっぱり男としては嬉しい。あれほど自分の気持ちを素直に表現できる奴もそういないだろう。

だからこそ、怖かった。震えるほどに怖かったんだ。梓の傷ついた顔を見る事が。

授業の内容なんて何も耳に入って来なかった。何の授業だったのかさえ覚えていない。

休み時間になると、シンシアさんが気を効かせてくれていたのか、梓を俺に近付けなかった。

そしてそのまま、放課後を迎えた。

「先輩、帰りましょう?」

シンシアさんは早々に教室を出て行き、梓が少しぎこちない笑みを浮かべて言ってきた。

「あ、ああ。なあ梓、今日は、俺の家に寄っていくか?」

それに、梓は少し目を丸くする。

「えっ、いいんですか? で、でも、今日は朝からお風呂に入っ

来てないんですけど、そ、それでもいいですか？」

「お前は何をするつもりだ何を。そんなことを期待すんな」

「梓は朝からお風呂入ってないって言っただけなのにい、先輩こそ、梓と何することを想像したんですかあ？」

「うっ……うるさい！ ほら、さっさと行くぞ」

梓の手を引き、教室を飛び出す。

「あんっ。今日の先輩積極的っ」

こんないつものやり取りが、寂しく感じられた。それを隠すように、前だけを見て、梓の手を引いて歩く。

歩いている時にはずっとうわの空で、梓と何を話していたかよくわからない。いつもよりも、家までの距離が短く感じた。

家には誰もおらず、自分の部屋へ梓を招き入れる。まだ明るい部屋の中を、梓はまじまじと見回した。

「うわあ。こんな時間に先輩の家に来るのは久しぶりです。いつもは深夜で暗いから」

「もう内鍵つけてあるから安心だな」

「ふふふ、梓のピッキング能力を甘く見ないことです」

自慢げに言う事じゃないだろ。犯罪行為だ。

それから梓は「ふうっ」と短く溜息を吐きながらベッドに腰を下ろす。そして上目使いを披露する。

「あの、先輩……いい、ですよ？」

頬を赤く染めて、不安そうに言う。

「だからな、俺はお前とそんなことをするつもりは」

「話し、あるんですよね？」

「あっ……」

梓を前にして、何かを誤魔化したり隠したりすることは無駄なんだな。こいつは、俺のことをよく見てるんだ。

「シンシアちゃんにどんな話しをしたか聞いても教えてくれなくてあとで、先輩に聞けって。先輩が、教えてくれるって。何か、あったんですか？ 何かされたんですか？」

「な、何もされてないよ」

咄嗟に、抱き締められたことを隠すように言ってしまう。今からもっと重要なことを言わなくちゃならないのに。

「先輩、気付いてないでしょ？先輩の体から、シンシアちゃんの香水の匂いしてますよ。それだけ、近くにいたってことです」

「いや、こ、これはだな……」

「先輩を責めるつもりはありませんよ。どうせまたシンシアちゃんがいきなり何かしたんですよね。わかってます。先輩は悪くないんです」

こつ素直に許されてしまうと逆に気味が悪いものを感じる。でも、やっぱり拗ねた様子の梓だ。

「ああ、まあ、そうだけど……」

何をどう切り出していいものかわからない。いつものようにおどけた感じで梓を拒否するわけじゃないんだ。完全な、決別を意味することを言わなくちゃならない。どうしても、それが重い。重く、のしかかる。

「梓は、シンシアちゃんが先輩にしたこと以上のことをするだけです」

そこで梓は舌舐めずりをして、俺に襲いかかる。半分心ここにあらざだった俺は、あっさりとベッドに押し倒された。抱き締められる形で、ツインテールの片方が顔にかかる。

「梓の匂いで、その香水の匂いを消し去ってあげます」

そう言っただけで体をぐいぐい擦りつけてくる。

俺は、何故か抵抗する気になれずに、なすがままになっていた。こういうことも最後なんだと思えば、少し寂しいと思っていたからかもしれない。

「先輩、どうして抵抗しないんですか？このままだと、梓は止まらなくなっちゃいますよ？」

「肝心なところじゃ、止めるぞ」

俺は梓の頭を抱き寄せた。俺の方から抱き寄せるなんて、これが

初めてかもしれない。ただ、今だけは、梓を愛しむように、優しく頭を撫でる。

「先輩、どうしてそんなことするんですか？ シンシアちゃん何があっただんですか？ どうして、そんなに優しいんですか？」

「……………」

「何か言っして下さいよ。いつも、いつもみたいに突き飛ばして下さい。先輩、変ですよ。どうして、こんな……………」

「梓……………このまま、聞いてくれるか？」

梓の体がびくつと震え、急に強張った。

「えっ……………や、やだ、何か聞きたくない。先輩、離して、離して下さい！」

抜け出そうとする梓を、腕で押さえつけた。卑怯かもしれないけれど、顔を見てたら話せない気がしたから。

「言わないといけない。俺から話さないといけない。」

「俺、さ……………シンシアさんと、付き合うことにした。だからもう、梓とこうやって会うことはできない」

……………言った。梓にとって、この上なく重い言葉を、俺は言った。

何故か、俺が泣きそうだった。これじゃ、顔を見たままだったら本当に言えなかったな……………。

「そ、そんな……………こと……………。や、やだなあ、せ、先輩までシンシアちゃんとグルになって、あ、梓をからかわないでくださいよあ」

声が震えている。精一杯、堪えている。気にしていないように振る舞っている。いや、現実を受け入れられないようにしているのか。

俺が言えるのは、ただ一言だけだった。

「ごめんな……………」

「あ、あっはは。やっぱりからかってたんだあ。あ、謝ったんなら許してあげなくもないですよー？」

「ごめん……………」

力を入れて、梓をきつく抱き締めた。そうしていないと、俺がこの場から逃げ出してしまいそうだったから。



染めて初めて会った日のこと、入学してきたときのこと、笑っていた顔、怒っていた顔、照れていた顔、驚いていた顔、少しだけ見た梓の寝顔、みんなと楽しそうに遊んでいた、はしゃいでいた顔。俺を戒めるかのように、鮮明に頭に浮かんでくる。もう、二度と見る事のできない、太陽の笑顔。

ごめん、ごめん、ごめん。

いつも愛らしい笑顔を向けて来てくれていた後輩に、声にならない声で何度も謝っていた。

そして 梓は黙って、部屋を出て行った。

部屋に差し込む夕暮れの光がやけに切なくて、またひとり、泣いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9078u/>

---

お嬢様のフーガ～金色のアサシン～

2011年7月27日03時28分発行